

恩人 高良芳枝先生

昨年、声楽科出身にもかかわらず、しのぶ会に参加させていただいた、末吉利行です。しのぶ会では、席の両隣に、私が芸大で副科声楽を指導したお二方が居られ、緊張せずに懐かしくお話することができました。何故、2年間副科ピアノの指導を受けただけの声楽学生が、しのぶ会に参加させていただきたく、同僚の中尾さんにお願いしたのか。以下の経験と思いがったからです。

ピアノは下手くそでしたが、声楽を学ぶにもとても大切で、少しでも上達する必要があると感じており、レッスンは休むことなく受けおりました。大学2年（19歳）のレッスン時、私の次に来るはずの学生は休みがちで、先生は時間をもて余しておられたのだと思います。課題の曲をひと通り弾き終わったあとに、「貴方、今何を歌っているの？」と聞かれ、「シューベルトの冬の旅を練習しています」も答えると「ちょっと楽譜を出して！私も学生時代には随分伴奏を弾いたのよ」とおっしゃられました。

そして、冬の旅の21曲目、Das Wirtshausをお見せしました。ご存知かと思いますが、この曲は、両手の和音進行のみの前奏で始まります。「弾いてみて！」緊張しながら弾き始めると「末吉君、これは、左手のこの指の音（内声）から右手のこの指の音に進行するの。だから、それを意識して弾くのよ！」。ピアノ専攻の方には当たり前のことかもしれません、私には衝撃的でした。ピアニストはそんなことを感じ、瞬時にコントロールして弾いているのかと！

私の声楽の師は畠中良輔先生でしたが、同じように、和音、和声？ハーモニーの変化には妥協の無い厳しい感覚で、対応しなければならない事を教え込まれました。また、和声を矢代秋雄先生に教わりましたが、課題をやってこない学生に呆れ果てながら「誰かシューベルトの楽譜持つてない？」とおっしゃり、お渡しすると何の曲かは忘れましたが「分かる？このたった1音で、これだけ世界が変わるんだよ！」とご自分で感動されながら何箇所も弾いてくださいました。わおっ！これが音楽か！和声的な分析は未だにできませんが、音の変化には最大限に注意を払い、敏感に感じる能力を身につけてきました。

これは演奏家としてだけでなく、教員として指導をする立場となって益々重要になっております。声楽の学生だけでなく、伴奏者としてかかるピアニストにも厳しく伝えて行かねばならないと日々努力しております。これを意識して弾いていないと、私の耳には音痴（ガチャガチャの音）に聞こえます。平均律楽器の宿命だと思っておりますが。

芸大在学中に指導を受けた多くの先生達のなかで、私の音楽人生の基礎とプロへの道をつけてくださった最も大切な師匠は、畠中良輔先生、高良芳枝先生、矢代秋雄先生のお三人に違いありません。

先生との出会いは本当に幸運な事でした。

本当に心から感謝しております。

末吉利行（愛知県立芸術大学教授）